



## あんげろす第61号

著者	司馬 純詩, 佐藤 正晴, 池尾 靖志, 清水 有子, 中井 純子, 播本 秀史
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
巻	61
発行年	2013-07-19
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/1833">http://hdl.handle.net/10723/1833</a>

# あんげろす



主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。

ペテロ後書 3-8

国際学部 司馬純詩

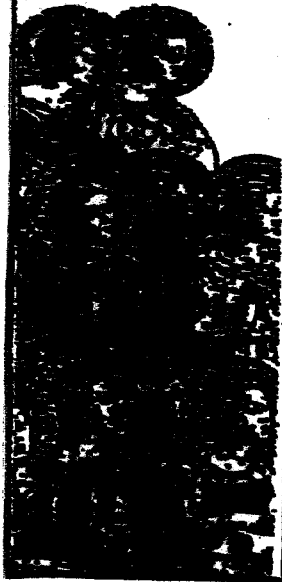
新制明治学院大学となって3年目、1952年の学院長・大学長村田四郎先生提唱の中山昌樹教授『キリスト教綱要』を中心とした「カルヴァン研究会」が開始された、と百年史にあります。当キリスト教研究所の嚆矢です。65年の出版企画活動が母体となり、翌年文学部附属キリスト教研究所が、初代所長園部不二夫教授の元に開設されました。以後随時研究会や討論式研究会、著名研究者の特別研究会を開催していた、とあります。紀要は67年の第1号より、最新第45号まで継続して刊行されています。

伝統ある明治学院大学キリスト教研究所所長を拝命しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

表題の句は、「明治学院キリスト教教育推進会議」が定めた今年の年間主題聖句です。

第61号

2013年7月



## 「私とキリスト教研究」

佐藤正晴

最初にこのエッセイ執筆の依頼をいただいた時に思ったのが、やはり「私のキリスト教研究」というタイトルと内容について書かなければいけないだろう、ということだ。だが、残念ながら、自分自身で今までにキリスト教研究をしてきたという自覚もなければ事実もない。よって、今回は「私とキリスト教研究」というタイトルと内容で今までの個人研究の経緯について簡単に拝察させていただくことにする。

私の専門研究分野は日本のメディア史である。きっかけは、大学院生時代から日々に変化する日本と世界との関係は、政治や経済のみならず、文化や芸術にも及ぶと思っており、メディアそのものの関わりについて「国際コミュニケーション」「国際化」として社会学研究を試みたかったことにある。とくに「国際化」という言葉を考えるに際して、戦争も「国際化」の形態のひとつであると考えた。日本にとってアジア・太平洋戦争での他国との出逢いは、遠い過去の出来事として忘れ去ることができないし、アジア諸国の人々にとっては、対日経験の原点でありつづけていると考えた。アジア・太平洋戦争の時代に、「国際コミュニケーション」の最大のメディアであった対外放送の歴史を研究対象に選んだ。研究の過程の中でメディアは「時代」を生み出すとともに「時代」に生みだされるものであり、その運命が「国家」と「社会」によって支配されることが、あまりにも多いと感じた。

その後、日本の戦時研究の重要性を認識しながらも、研究のフィールドを戦時および占領期から1950年代あるいは1960年代のメデ

ィア研究に移行していった。

現在は、1950年代から1960年代の日本の大衆文化・ポピュラー文化・娯楽・芸能について放送・出版・広告の観点から研究している。1950年代から1960年代に日本へ入ってきたアメリカ文化は日本の大衆文化に大きな影響を与えた。アメリカの影響を受けた日本が徐々に独自のメディア文化を形成していく過程が現在の研究テーマの一つである。アメリカの1950年代から1960年代のテレビ番組が、同時期の日本のテレビ文化に与えた影響について懐古主義に傾倒しすぎることなく考察することを目指している。

また、戦後のメディア研究として、「日本人の食とメディア」というテーマのもとで1950年代の『奥様手帖』を一次資料とした「料理番組」研究や第五福龍丸被災報道について、ジャーナリズム論の観点からの研究を進めている。食とメディアには切り離せない関係があり、日本人は報道を通じて食の危険の現実を知らされる一方で、メディアを用いての宣伝や広報といったプロモーション活動が日本人の食文化の形成の一翼を担った側面を見逃すことができない。1955年8月、森永乳業が「ヒ素ミルク中毒事件」報道で世間を震撼させた時期に、同社が新商品の開発およびメディアによる宣伝や広報を通じて取引先や消費者の信頼を回復させていった事例などが明らかにしている。

今後は、数こそ少ないが、日本全国の放送局におけるキリスト教関連の宗教番組の歴史と現状と可能性について考えてみたい。とくに民放ラジオの「聖書の話」などは、放送音源こそ保存されてはいないかもしれないが、放送開始年が1950年代であり、1950年代の日本のキリスト教とメディアの関係性を考える上で有意義な研究材料となるであろう。また、メディアの現場でクリエイティ

ビティを發揮したクリスチャンの作品に関して、宗教性を実証的に採り上げた先行研究が少ない。たとえば、市川森一氏の作品などから宗教性のあるメッセージを学術的に抽出し、分析する作業にも微力ながら取り組んでみたいものだと考えている。

いつか「私のキリスト教研究」というタイトルで一文書ける日が訪れるのかわからないが、新しい課題に対して自分自身、楽しみに向き合いたいと思っている。

さとう・まさはる（所員・社会学部教授）

オルガンと私

池尾靖志

私がキリスト教と出会う1つのきっかけはオルガンであった。

出身大学は関西学院大学で、関学には、それぞれの学部にチャペルがあり、学部ごとに、チャペル・アワーを行っていたため、オルガニストの数がそれなりに必要であった。そのため、毎年4月にオルガニストの募集を宗教センターが行っていた。

大学に入りたての私は、別にクリスチャンでもなんでもなく、ピアノは習っていたので、一度、オルガンを触りたいとは思っていたものの、チャペル・アワーでオルガンを弾くなどということは思いもしなかった。それよりも、下宿生であった私には、友人ができるのか、とか、そちらの方が重要で、オルガンを習うなどということは微塵も考えていなかった。

ただ、大学2年に入り、大学の寮に入ろうとした時のセールス・ポイントになるかという、いかにも俗な考え方でオルガニストに応募し、オーディションを受けて合格したので、オルガニストへの道を歩むことになった。

よく、ピアノを弾ければオルガンも弾けるでしょ、と言われるが、ピアノは、鍵盤をたたくとハンマーがピアノ線をたたく打楽器であるのに対し、オルガンは、鍵盤を押すとそれぞれの音を奏でるパイプ1本1本に、送風機によって空気を送って笛が鳴る管楽器であるため、奏法はまるで違う。まして、大きなオルガンでは、足鍵盤も2オクターブ半あり、足鍵盤でも旋律を奏でなければならぬ。大変な楽器である。

習い始めたころは、よく、「それでもオルガンを弾いているつもり？」と先生に怒られ



たものだが、そのうちに、オルガンの魅力にもとりつかれ、夏休みの、レッスン生が誰も来ないときには、練習用の電子オルガンではなく、礼拝堂にあるパイプオルガンを弾き倒していた。おかげで、大学の3年、4年は、ゼミが終わるとゼミ仲間とはさっと別れ、オルガニストの控室でオルガニストとオルガン音楽について話をするか、オルガンの練習をするようになり、まるで音大生のような生活を送るようになっていた。

それでも、国際関係論（国際政治学）の世界は、「世界平和」を考えるためには必要不可欠な知識がつまっており、国際関係論を学ぶために大学院に行きたいとも思っていたので、宗教センターの図書室でバイトもしながら、勉強もしていた。ただ、大学4年の秋に、師事しようと思っていた先生が52歳の若さで急逝されたため、行き場を失った私は、どうすることもできずに年を越した。

バブル絶頂期に、就職活動もせず、就職も決まっていない4年生が、卒業間近になったときに、たまたま、朝日新聞の求人欄をみていたら、神戸YMCAの職員（中途採用）を募集していたので、新卒であるにもかかわらず、中途採用の試験（面接）を受けた。面接は2対2で行われ、当然ながら、社会経験のあるもう一人の受験生は、自己アピールの仕方もよく心得ていて、私は言葉を発することができなかった。それでも、大学の寮のなかで、小さな伝道所が礼拝を日曜日に行っており、そこでオルガンを弾いていたという、たったその一言で採用が決まった。後で聞けば、少しでもキリスト教とかかわりのある人間を採用したいという人事の意向だったようである。また、大学のお抱えオルガニストでもあったので、創立記念礼拝など、大学の式典の時には奏楽をしていたから、関学とのコネも期待されていたようである。

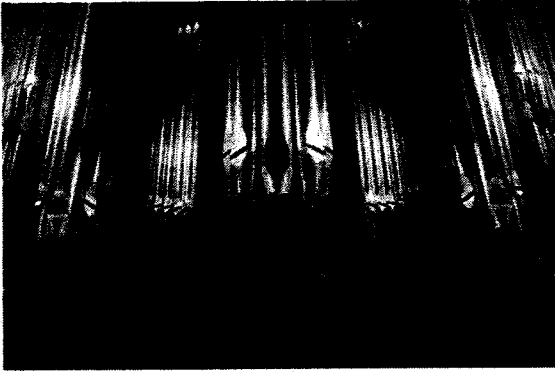
働き始めると、日曜日にもキャンプなどが入り、思うように教会には行けなかった。ただ、年末年始に、YMCA 予備校が関学のセミナーハウスで受験合宿を行っており、学部時代にそのセミナーハウスで奏楽をしたこともあって、オルガンを練習できる、というそれだけで、仕事とは関係なく、陣中見舞いも兼ねて受験合宿にでかけていった。その夜（大晦日）の、上司との会話が、気がつく、今通っている教会の元日礼拝に足が向き、その年のイースターに洗礼を受けたいという言葉が発していた。周りに支えられて生きてきた自分のありさまを振り返ってのことだった。

3年働いた時点で、たまたま受けた大学院の社会人入試に合格したので、YMCA を退職した。その後は、大学近くの、京都市内の教会で奏楽をしたりしていたが、論文に追われるようになると、教会とも縁遠くなり、離れたときに出かけるぐらいのものになっていた。

そのようななかで、今回、渡辺先生とも不思議なご縁でお知り合いになり、キリスト教研究所の客員研究員の話を持ってきてくださった。これまで、忙しさにかまけて教会にも十分に行けていなかった自分を、神が、教会生活のあり方を考えると同時に、オルガンの練習ももう一度しっかりしなさいと導いてくれたものと理解して、お引き受けることにした。先日、明治学院の宗教部で話し込んでいたら、教職員関係の方がオルガン講座を受けるとはあまりないようである。それでも、明治学院（白金）のオルガンは、バッハの音色を奏でるには最適のオルガンである。また、チャペル・アワーに出ると、毎日、手抜きをすることもなくという失礼であるが、毎回違う曲を前奏、後奏に選曲され、讚美歌の後には即興演奏もある長谷川先生の

オルガンは、オルガニストである私にはたまらない。短い任期期間中ではあるが、明治学院のオルガンを楽しみたいと思っている。

いけお・やすし（客員研究員）



写真：明治学院礼拝堂（白金キャンパス）のパイプオルガン（学校法人明治学院HPから引用）

### 『ドチリナ・キリシタン』に見るキリシタンの入信事情

清水有子

今年度より二年間、客員研究員としてお世話になります。この春以降、スリッパをはいて研究所内をウロウロしているアラフォー女は私です。恥ずかしがり屋のため怪しい動きをしているかもしれませんが、けして皆様に危害を加えるような者ではありません。暖かい眼で見守っていただければ幸いです。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

私はこれまで近世日本の対外交渉史（ルソンの交流史）を研究し、それと関わる限りでキリシタン問題を論じてきましたが、今後はキリシタン史を中心的課題に据え、論文を書いていくつもりでおります。その転換にあたり、こちらのキリスト教研究所で研究させていただけることになりました。本当に幸先良いスタートであり、研究員に推薦して下さった渡辺祐子先生に、この場をかりて御礼申し上げます。

今回は、キリシタン関係の史料を読んで、面白いなと思った問題を少しご紹介したいと思います。16世紀末、日本で初めてキリスト教の教理書、『ドチリナ・キリシタン』が印刷、刊行されました（初版1591年、改訂版1600年）。この教理書の原本は、ポルトガルのイエズス会神学院の教授ジョルジェ Marcos Jorge が著した児童向け教理書であったと言われています（H・チースリク他『日本イエズス会版キリシタン要理』岩波書店、1983年）。宗教改革さなかのヨーロッパでは、ルターが作成した問答形式の教理書がベストセラーとなり、刺激を受けたカトリック教会もまた、内部刷新の一環として、新たな教理問答書を出すようになります。児童教育を重視したイエズス会では、児童専用ドチリナ（教理書）の作成をジョルジェに命じました。1566年に発行されたジョルジェのドチリナは好評を博し、間もなくインド、次いで日本にも伝わりました。児童用のこのテキストは、キリスト教に初めて接する日本人に教理をわかりやすく伝えるのに相応しかつたため、日本版ドチリナの原本として採用されたと考えられます。

ジョルジェ本と日本のドチリナを比較すると、一見同じような内容でありながら、いくつかの異同が見られます。中でも注目されるのが、両本の序文と第一章の違いです。

まず日本のドチリナの序文では、イエス・キリストが教えた真実の掟（信・望・愛）をキリシタンに教えるためにこの小さな本を作った、ということ述べていますが、これはジョルジェ本序文の、子どもに信仰簡条を学ばせる本であるという趣旨と、当然のことながら異なっています。しかしここで注目されるのは、日本版において、真実の掟を教えるのはキリシタンが「後生の道」に迷わないためであり、また「後生のために大切な事をキリシタンに教える」（注・清水による現代語訳、以下同）ことを強調している点です。冒頭では「全世界に行って、すべての造られたものに福音を述べ伝えなさい」というマルコによる福音書の一節（16:15）が引用されていますが、この部分もまた、「あなたがたも全人類に後生が助かる未知の真実の掟を弘めよ」と、「福音」を「後生が助かる未知の真実の掟」と説明しています。

次に両本第1章の異同を見ると、日本のテキストにしかない文章が次の2か所に認められます。「……この御一体（神）を拝み、貴く敬わなくては、後生の助けにあずかることは、まずありません。またこの後生の道は、キリシタンの法だけにあるものです。だから、キリシタンにならなければ、後生を助かることにはないと理解しています。」「人間は、肉体だけではなく、果てることのないアニマ（靈魂）を持っています。このアニマは肉体に命を与え、たとえ肉体が土、灰になっても、終わることがありません。ただ（生前の）善悪に従って、後生の苦楽に関係するというものです。」やはり、「後生」の救いを意識した教理説明となっています。

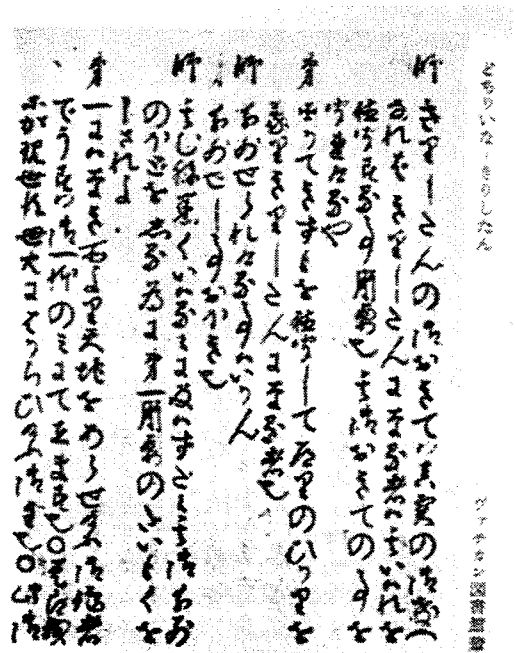
以上のようなテキストの改編には、キリシタン時代当時の日本人が宗教に求めていたものを、イエズス会士が汲み取った「あと」が如実に示されていると言えます。

キリシタン時代の日本人のキリスト教入信は、教会と一体化したポルトガル貿易の利益目的、あるいは集団改宗の影響などが指摘されますが、そこからは信仰に対して極めていいかげんで無責任な日本人の像が浮かびます。

しかし、『ドチリナ・キリシタン』には、「後生」の救いを真剣に宣教師に問うた当時の日本人の、宗教的要請の一端を見出すことができる。そして宣教師側は、その要請に応えたことがわかります。

キリシタン時代の日本人がキリスト教を受容した要因として、この点は見逃し得ないように思うのです。

しみず・ゆうこ（客員研究員）



資料：「どちりいな一きりしたん」（海老沢有道他校注『キリシタン書排耶書』、岩波書店、1970年）

「或る英詩に魅せられて」

中井純子

Love (III)

George Herbert

Love bade me welcome;  
yet my soul drew back,  
    Guilty of dust and sin,  
But quick-eyed Love,  
    observing me grow slack,  
    From my first entrance in,  
Drew nearer to me,  
    sweetly questioning,  
    If I lacked anything.  
‘A guest’, I answered, ‘worthy to be here’,  
    Love said, ‘You shall be he’,  
‘I, the unkind, ungrateful? Ah, my dear,  
    ‘I cannot look on thee’.  
Love took my hand, smilingly did reply,  
    ‘Who made the eyes but I?’  
‘Truth, Lord, but I have marred them;  
    let my shame  
    Go where it doth deserve,  
‘And you know not’, says Love,  
    ‘Who bore the blame?’  
    My dear, then I will serve,  
‘You must sit down’, says Love,  
    ‘and taste my meat’.  
    So I did sit and eat.

(紙面の都合上、行の置き方が原作と異なります)

この詩は、英国の詩人 George Herbert の不朽の名作です。George Herbert は1593年にウェールズのモントゴメリーで英国

の貴族の家庭に生まれ、ケンブリッジ大学 Trinity College で学びます。後に母校で教鞭をとっていた時期には、大学への賓客があった時にスピーチを行う Orator としても、言語の使い手としての天賦の才能を発揮。後には、時のジェームス王に招かれ議会で2年間を過ごしますが、政界には留まらず、聖職を選び、地方の教会を牧しつつ、詩作をしたとされています。

Simplicity - その中に 深い洞察と思索のこめられたこの詩を読んで、また、Herbert の生い立ちを知り、こんな詩をつくる詩人が、どんなところで牧会をしながら詩作したのか、それを見出すためだけにでも、英国に行ってみようと思いました。

その機会が訪れたのは、文部省派遣留学生として英国に亘り、数年後、英国の南部に旅した時でした。1079年にノルマン人の Williams 一世により鹿狩りのため「新しく」つくられたので New Forest と呼ばれる森には、くねくねと曲がって続く森の小道に、ポニーの親子が散歩中に談笑しているかのように立ち止まっていたり。。その道を抜け、車はやがて、イギリス最長の尖塔をもつソールズベリー (Salisbury) 大聖堂につきました。マグナカルタの最良の写本も保存するその内部を案内されていると、陳列された銀器の中に、George Herbert と彫られた銀のワインカップを見つけました。George Herbert はこの近くにいたに相違ないと、問い合わせると、近くの Bemerton の教会を牧していたとのこと。Herbert はよくベマートンから徒歩で40分の道のりを歩いて、ソールズベリー大聖堂での夕礼拝 (Even Song) に出席していたそうです。私たちは、その足で、ベマートンを訪れました。小さな教会で、Herbert が Rector of Fugglestone として牧していた3つの教会の一つであり、確かに歴代の



牧師の中に George Herbert の名がありました。

牧者としてのハーバートは、人の必要をよく省みる、深い洞察力の持ち主でした。詩人としてのハーバートは、Soul composed of harmony (Charles Cotton)で、1633年に、40歳で夭折した時にも、「死の床でも賛美歌を作っていて、今は天国で天使とともに歌っているにちがいない」と言われるような人物でした。

当時、学者と一般大衆の英語におけるギャップは、現代の比ではないと言われます。冒頭の詩は、キリストの行為に示されている神様のアガペーの愛と、それをただ受けることによってのみ救われる人間の関係性を隠喩で表し、「信仰による義」を見事に心に訴えかけてくる詩であり、その意味では、永遠に新鮮な題材をもつ詩であると言えるでしょう。

そこには、キリスト教の真理を一般の人のわかる言葉で伝えたいというハーバートの思いが結実しています。そして、この想いは、彼の心の根底にあったのだと思われます。それは、詩篇23篇に題材を得て、彼がつくったメトリカル・ヴァージョンにも表れています。

詩篇23篇とハーバートのメトリカルヴァージョンを比較すると、後者には、ハーバートの思想が挿入されています。1節のThe Lord is my Shepherdは、後者ではThe God of Love, my Shepherd is, となっていて、of Love がハーバートの挿入です。Love という語は、この短いメトリカルヴァージョンの中で、2回用いられている唯一の言葉です。どのような愛かと言いますと、冒頭の詩で描写されているアガペーの愛です。詩篇23篇のテーマ God with us を示す聖句 For thou art with me は、メトリカルヴァージョンでも、

そのまま変更なしに用いられている唯一の表現で、その重さを感じさせます。thou dost make me sit and dine という表現も、ハーバートの詩 Love (III) を彷彿とさせ、その詩の taste my meat という言葉は、「取って食べよ、これはわたしのからだである」(マタイ福音書 26:26) というキリストの言葉を想起させます。

聖書の真理と、罪人のためにすべてを与え尽くされる神様の愛を、単純であるがゆえに、深く心に響く言葉で綴るハーバートの詩やメトリカルヴァージョンは、今も人々に親しまれている、私の大好きな英詩です。

The 23<sup>rd</sup> Psalme  
(Metrical Version)

George Herbert

The God of Love my Shepherd is,

And he that doth me feed:

While he is mine, and I am his,

What can I want or need?

He leads me to the tender grasse,

Where I both feed and rest

Then to the streams that gently passe:

In both I have the best.

Or if I stray, he doth convert

And bring my minde in frame:

And all this not for my desert,

But for his holy name.

Yea, in death's shadie black abode

Well may I walk, not fear:

For thou art with me; and thy rod

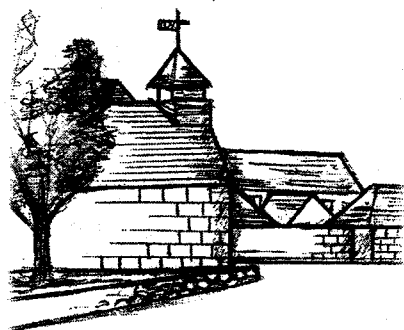
To guide, thy staff to bear.

Nay, thou dost make me sit and dine,  
Ev'n in my enemies sight:  
My head with oyl, my cup with wine  
Runnes over day and night.

Surely thy sweet and wondrous love  
Shall measure all my dayes;  
And as it never shall remove,  
So neither shall my praise.

協力研究員として、宣教師研究に参加いたします。どうぞよろしく願いいたします。専門は聖書の和訳史です。

なかい・じゅんこ（協力研究員）



雑録

播本秀史

渡辺前所長が任期1年を残し、サバティカルを取られたので、残りの一年を司馬先生が選出され担当されることとなった。主任は継続して下田先生であった。今年度はこの体制で運営される予定であった。ところが、下田先生が前年度末になって他大学に移られることが判明した。そこで新主任は教養教育センターの植木先生が所長より指名されることになったが、植木先生は今年度春学期、育児休暇中なので急遽、私播本が春学期のみ主任を担当することとなった。今年度のスタッフは所長司馬、主任播本（春学期）植木（秋学期）、事務系は派遣の納谷となる。今年度もよろしく願い申し上げたい。

さて、今年度は、前年度末でご退職になられた遠藤所員（社会福祉学科教授）のご紹介によって、待望の新所員をお迎えすることができた。社会学部社会学科の坂口緑先生、佐藤正晴先生である。お二人の加入によって新しいキリスト教研究所の展望が開かれてゆくような気がする。私事ながら坂口先生のお父上には学生時代教わったことがある。

また、客員研究員として、池尾靖志氏と清水有子氏をお迎えした。お二人には今夏7月27日の一日研修会で日頃の研究成果の一端を発表していただくことになっている。とくにオルガニストでもある池尾氏は今年度から発足した「キリスト教芸術」の中心的メンバーの一人として、すでに公開研究会などを企画運営されている。

キリスト教研究所では様々なプロジェクトがあり、所員がそれぞれのプロジェクトの長を担当し、その下に協力研究員、客員研究員が配置されている。

今年度、明治学院大学は創立 150 周年を迎える。キリ研でもそれに因んで記念論文集が企画され、まもなく『境界を超えるキリスト教』(教文館)というタイトルで出版となる。ご執筆くださった方々、理事会、学院関係各位に感謝の意を表させていただきたい。司馬所員(当時)が記念出版プロジェクト長となり、精力的に動かれた。編集経験がおりという司馬先生のご尽力なくしてこの出版はならなかった。なお、編集委員会も組織され、編集委員長司馬純詩、編集委員大西晴樹、同渡辺祐子、同播本秀史が担当した。

キリスト教研究所のメンバー表も今回号に紹介させていただいた。ご関心のある方のご加入をお待ちするとともに、今後のキリ研にもご期待いただければ幸いである。

## 研究所活動(4月から7月)

### 所員会議

#### 第1回

開催日時: 2013年4月24日(水) 15:30-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

#### 第2回

開催日時: 2013年5月22日(水) 14:00-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

#### 第3回

開催日時: 2013年6月26日(水) 14:00-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

#### 第4回

開催日時: 2013年7月27日(土) 10:30-

開催場所: 白金校舎キリスト教研究所

### 明治学院研究1フィールドワーク

#### 築地編

開催日: 2013年6月8日(土)

引率者: 中島耕二(本学教養教育センター客員教授、キリスト教研究所協力研究員)

#### 横濱編

開催日: 2013年7月6日(土)

引率者: 司馬純詩(本学国際学部教授、キリスト教研究所所長)

### 1日研究会

開催日時: 2013年7月27日(土) 15:00-

開催場所: 白金校舎92会議室

総合司会: 司馬純詩 所長

15:00-15:40 発表①(発表40分)

発表題: 「平和学とキリスト教 ―沖繩でのフィールドワークを通して考えること―」

発表者: 池尾靖志 客員研究員

15:40-16:00 コメント、質疑応答

司会者: 永野茂洋 所員

16:00-16:20 休憩

16:20-17:00 発表②(発表40分)

発表題：「浦上キリシタン史研究の課題と意義（仮）」

発表者：清水有子 客員研究員

17:00-17:20 コメント、質疑応答

コメンター：播本秀史 主任

17:20-17:40 休憩、移動

17:40-18:40 懇親会

（場所：白金校舎キリスト教研究所）

プロジェクト主催公開研究会

・キリスト教芸術研究プロジェクト

タイトル：

「礼拝におけるオルガンの役割」～明治学院に設置されたバロック様式のオルガンを探る～

開催日時：2013年7月11日（木）18:30-20:00

開催場所：白金校舎記念館小チャペル

講師：長谷川美保（明治学院音楽主任・オルガニスト）

司会進行：池尾靖志（キリスト教研究所客員研究員）

・明治学院と東アジア研究プロジェクト

タイトル：

「ポスト冷戦時代の日韓問題を考える」

開催日時：2013年7月15日（祝日・月）2限（10:55-12:25）

開催場所：横浜校舎720教室

講師：朴裕河（パク・ユハ）（韓国世宗大学教授）

コメンター：高橋源一郎（本学国際学部教授）

・キリスト教主義教育研究プロジェクト

タイトル：

「キリスト教の視点から見る「オキナワ問題」」

開催日時：2013年7月26日（木）14:00-

開催場所：白金校舎キリスト教研究所

講師：岩井健作（明治学院教会主任牧師）

司会進行：池尾靖志（キリスト教研究所客員研究員）

賀川豊彦学会

タイトル：「コミュニティからみた賀川豊彦」（仮題）

開催日時：2013年7月20日（土）14:00-

開催場所：白金校舎92会議室

講師：小林正弥（千葉大学大学院教授）

キリスト教研究所後援シンポジウム

参院選直前緊急シンポ「この国はどこへ行くのか!?」～教育・政治・神学の視点から

開催日時：2013年7月20日（土）14:00-

開催場所：白金校舎1253教室

パネリスト：

朝岡 勝氏（日本同盟基督教団牧師）

岡田 明氏（都立高校教員）

比企敦子氏（NCC 教育部総主事）

渡辺祐子氏（明治学院大学教授）

アウシュヴィッツのコレベ神父 原画展

「絶望からの希望」

開催期間：2013年7月31日（水）-8月8日（木）10:00-16:00（土日を除く）

開催場所：白金校舎キリスト教研究所

## 新着図書（4月から7月）

・『日韓キリスト教関係史論選』徐正敏著、かんよう出版、2013年。

・『福音と世界』No. 4、新教出版社、2013。

・『福音と世界』No. 5、新教出版社、2013。

・『福音と世界』No. 6、新教出版社、2013。

## 2013 年度キリスト教研究所メンバー

所長 司馬純詩

主任 播本秀史

### 所員

教養教育センター: 植木 献、嶋田彩司、永野茂洋、渡辺祐子

文 学 部: 久山道彦、齊藤栄一、播本秀史、

経 済 学 部: 鶴殿博喜、佐藤 寧、手塚奈々子

社 会 学 部: 坂口 緑、佐藤正晴、深谷美枝、宮田加久子

法 学 部: 鍛冶智也、辻 泰一郎

国 際 学 部: 司馬純詩

(計 17 名)

### 名誉所員

大西晴樹、遠藤興一、小田島太郎、加山久夫、久世 了、柴田 有、千葉茂美、

中山弘正、新倉俊一、橋本 茂、花田宇秋、真崎隆治、丸山直起、水落健治、森井 眞、

山崎美貴子、吉田 泰

(計 17 名)

### 客員研究員

池尾靖志、清水有子

(計 2 名)

### 協力研究員

Andrew H. Ion、石本東生、稲垣久和、今村正夫、岩崎次郎、岩田ななつ、岡部一興、

加藤拓未、北川一明、木村一、清澤達夫、小暮修也、小林孝吉、齋藤元子、佐藤飛文、

島田由紀、徐亦猛、鈴木 進、徐正敏、高井ヘラー由紀、田中浩司、辻 直人、

手代木俊一、中井純子、中島耕二、原 豊、牧 律、松谷嘩介、丸山義王、

宮坂弥代生、村上文昭、吉馴明子、渡辺英男

(計 33 名)

### 派遣社員

納谷智子

(計 1 名)

合計 70 名

---

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第61号

---

2013年7月19日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

---

題字：澁谷 浩